

笑顔から気付いたこと

安部 心優

「行つてらっしゃい。」

お母さんは、毎朝学校へ行く私を笑顔で見送ってくれる。私も、何度かふり返つては、お母さんに手をふる。

お母さんの笑顔を見ると

「今日も一日、がんばろう。」

と元気が出る。つまり、お母さんの笑顔は私にとって「まほうの笑顔」なのだ。

けれど先日、朝学校へ行くときに、お母さんと言ひ合いをしませんでした。その日は、朝から強く雨が降っていて、少し歩いただけでびちゃびちゃになりそうだった。

「夕方まで強く雨が降るみたいだから、長ぐつはいてね。」

とお母さんは私に声をかけた。私は、長ぐつを少し前に買ってもらったのに、学校にはいていくのは嫌だった。なぜなら、五年生にもなると長ぐつをはいてくる人が少ないし、下駄箱に入らないからだ。

「みんな、長ぐつはいてこないし、大丈夫だよ。」

と私が言うのと、やはり母は、はいて行つた方がいいわよと言つた。私は待ち合わせをしている友だちを待たせてしまうのではないかと、あせりもあり、ついお母さんに

「五年生にもなると、はいてくる子はいない。」

と言つてくつをはき、友だちが待つ場所に走つて行つてしまったのだ。学校に着いてみると、雨が強かつたせいか、長ぐ

つで登校してきた子は、クラスで三分の一位だった。その時、私は朝のやり取りを後悔した。それに、今日は「行つてきます」も言わず家を出てきてしまった。きつとお母さんのことだから走つて行つた私を見送っていただろう。そう考える私の心は、モヤモヤしたままだった。その時、私はお母さんの話を思い出した。お母さんは、私のことを笑顔で見送る以外に、玄関でハグをしてくれる。これは、今日も一日元気で過ごせるようにと、「ケガ・病気などせず無事に帰つてこられるためにしている」と聞いたことがあった。

お母さんは、どんな時でも私のことを考えてくれているのに私は自分のことしか考えていないことに気がついた。私が具合が悪い時は、ねずに私のそばにいてかん病してくれたら、私が困っている時は一緒に考えてくれたり、他にも沢山あるだろう。私は改めて、お母さんがいてくれるうれしさを感じた。家族がいるのは当たり前だと思つていて、存在の大切さを忘れかけたのかも知れない。

たつた一言「行つてきます」の言葉には、一日をがんばるための言葉でもあると思うが、明日から私は、元気に一日が過ぎせる喜び、大好きな家族、大切な友だちと時をきざめる喜びを感じながら、この言葉を言っていきたい。そう気付かせてくれたお母さんに感謝をこめて。